

令和 3 年度の献血実績と今後の方向性について

1. 令和 3 年度の実績と評価

- 令和 3 年度における実績として、延べ献血者数は、対前年度約 1.5 万人の増（0.3%増）の 505.3 万人、献血率は前年度 0.03 ポイント増の 6.1%となった。課題とされている 10 代～30 代の若年層の献血者数については、令和 3 年度においては対前年度約 2.4 万人減少（1.4%減）となった。（※ 1）
- 全体的に、令和 2 年度と同様に、令和 3 年度においても新型コロナウイルス感染症の影響で、職場や学校への献血バスの出勤回数が減少し、主として常設の採血所での献血に頼らざるを得なかったものの、多くの方の御協力により、輸血用血液製剤及び原料血漿の安定供給に必要な血液量を確保することができた。（※ 2）
- 若年層に対しては、令和 2 年当初に日本赤十字社が実施したホームページや web 会員サービスを用いた集中的な献血の協力依頼は一定の効果をもたらしたが、今後も持続可能で有効と考えられる取組や働きかけを模索し続けることとする。

※ 1 令和 3 年度の年齢別献血率によると、18 歳では 6.3%、19 歳では 6.3%で、昨年度の 5.9%、5.8%から増加した。24 歳以上から 30 代半ばまでは横ばい。その後緩やかに上昇する傾向は令和 2 年度と同様。

※ 2 輸血用血液製剤の供給本数は、対前年度で約 0.7%増加した。原料血漿の国内製造販売業者等への配分量（在庫取崩量を除く）は、免疫グロブリン製剤等の供給量の増加により、対前年度で約 1.2%増加した。

2. 令和 5 年度献血推進計画策定にあたっての方向性（案）

- 将来にわたって安定的に献血者を確保するためには、特に若年層に献血の必要性をご理解いただき、行動変容を求める必要があるのではないかと。また、初回献血者が繰り返し採血所を訪れたいよう、献血者のニーズを踏まえて、ソフト面ハード面からの改善に着手し、それらを一体的に PR してはどうか。

- 献血者数及び献血率の増加に向けて、戦略的に各種取組を推進する必要があるため、令和5年度献血推進計画の策定にあたっては、以下の項目を重点的に推進することとしてはどうか。
 - ① 10代については、令和2年度は新型コロナウイルス感染症拡大による影響が大きく見られたものの、令和3年度は令和2年度に比べ10代の献血者数及び献血率が改善傾向にあることから、引き続き、学校献血や各種普及啓発の実施を通じて、初回献血者の確保を中心とした取組を行うとともに、個々の献血やweb予約の推進も並行して進める。また、継続的な献血の協力を得られる取組を検討する。
 - ② 20代・30代については、近年において18歳、19歳をピークに30代半ばにかけて減少する傾向が見られることから、仕事や家事等で忙しい方が少しでも献血する機会を確保できるよう、利便性を高めるとともに、一度献血を経験された方が、継続して繰り返し献血に協力いただくための取組を検討する。
 - ③ 新型コロナウイルス感染症拡大による献血時の対応について、令和3年度推進計画より「新興・再興感染症のまん延下」においても、採血事業者は献血環境の保持と献血者への感染防止を図るとしたが、今後の状況を踏まえて引き続き記載することを検討する。